知事と津久井やまゆり園職員との対話（R1.12.26）

１　対話の概要

（１）津久井やまゆり園寮長・主任との対話

・日時　令和元年 12 月 26 日　16：20～17：05

・場所　津久井やまゆり園芹が谷園舎

・陪席　法人事務局総務部長等

（２）津久井やまゆり園部課長との対話

・日時　同日　17：10～17：40

・場所　同上

・陪席　津久井やまゆり園園長、法人事務局総務部長等

２　津久井やまゆり園寮長・主任との対話の概要

（１）知事あいさつ

（知事）今日は、お忙しい時間にお時間を作ってくださり、ありがとうございます。ご承知のとおり、先日 14 日に私がここに来させていただいて、今回の方針変更についてご説明いたしました。本来ならば、もっと皆さんにお話したうえで、県議会でも発表しなければいけなかったんでしょうけど、切羽詰まった状態だと私は認識しております。時間がない。来年１月８日から始まる裁判の前にある程度の方向を出しておかなければ大変なことになる。そんな思いで、順番が逆になったんですけれども、まず、お詫びさせていただきたいと思います。そんな中、先日も来させていただいて、利用者・ご家族の皆さん２組とお話をさせていただきました。ゆっくりとお話をさせていただいたと思います。まだ、そんな簡単にはご理解されないと思うので、職員の皆さんとゆっくりお話をする場を作っていますので、ぜひ率直なご意見をお伺いさせていただきたいと思います。それではよろしくお願いします。

（２）職員からの意見・感想・質問

・12 月５日の知事のご発言があってから、大きな不安を抱えながら仕事をしている。そういう状態であっても、利用者さんの生活はここにある。利用者さんが不安な気持ちを持たれないよう、ぎりぎりのところで頑張っている。利用者もここで生き生きと自分たちのしたいことを実現しようと思っていて、職員も支えたいと思っている。知事も法人も職員を守るというが、具体的な内容が見えないから不安。12 月 14 日に知事が来園した時、利用者が「みんな一緒がいい。」「職員も利用者もみんな一緒がいい。」そう言ってくださった利用者さんの声を自分たちは支えたい。

・意思決定支援でこれから先の話をするときに、継続して我々が支援できるなら、さまざまな可能性や先の思いまで含めて話し合える。我々が支援できなくなった時、このまま話を継続していいのか、という不安がある。知事が言う「利用者の目に立って考える支援」について話を伺いたい。利用者さんは言葉だけでの支援は難しいため、さ

まざまな方法で伝えているが、知事は言葉だけで説明をしていた。今後どういうふうに説明していくのか。意思決定の話の中では、芹が谷と千木良の行き来を含んだ話をしているが、千木良、芹が谷が別法人になった際、本人が望むような行き来（居住含む。）ができるのか。

・職員の働き先の保証はどういった内容か、具体的に説明してほしい。先日の知事の発言では過去に対する指摘があったが、今まで取り組んできたこと、今取り組んでいることについて話がなかったのは残念。一部の情報で話をした。仕事に対するモチベーションを保つことが難しい。

・12 月５日の知事発言にあった指定管理期間の短縮の判断は、知事自身の判断か。また、なぜ愛名ではなく津久井だけ注目しているのか。県議会ではさまざまな事情を勘案したとあるが、具体的にはどのような事情か。また、津久井やまゆり園視察の感想、他施設を見学したことがあるのなら、そちらの感想も伺いたい。

・理事長が印を押さなかった場合、知事はどうするのか。

・知事は、先日、愛名の元園長逮捕を受けて、これから共同会に対して良くない情報がたくさん出てくる、私のところに次々と入ってきている、内容は話せないと言っていたが、具体的に教えて欲しい。大丈夫です、安心して下さい、と言っていたが、具体的にはどういうことか。根拠や保証はどこにあるのか。

・他の法人に行かれた方が生き生きとしていると話が出たが、園内の利用者の話は一人もあがらない。津久井の皆さんの暮らしを語られなかった。

・ＮＨＫ報道の内容と現在の３名の暮らしぶりを比較したのか。一方の意見しか出てこない。12 月５日の発言の前に芹が谷に来てほしかった。

・指定管理期間の短縮について、これまで県の監査を受けていて、指摘事項があればその都度改善して取り組んできた。それでも良くない支援があったというのは、指定管理をしていた県の責任はないのか。再スタートをするなら、県の体制も見直していただきたい。

・利用者・家族の意見をしっかり聞いてほしい。一緒にいたいという声を聴いてほしい。特性から、非常に繊細な方が多く、利用者の今後を心配している職員が多い。

・意思決定支援の取り組みについては、一人ひとりと時間を作って向き合ってきた。身体拘束については、きちんと反省して向き合い、ゼロに向けて取り組んでいる。こういった取組みを知っている中で発言されたのか。法人として何が悪かったのか、説明して欲しい。

・意思決定支援会議のお陰で事件の傷が癒えている。利用者さんとご家族、県や相談支援事業所の皆さんと一緒にチャレンジさせていただいている。とても楽しい時間、今まで以上に深い関係になってきた。

・愛名の園長は道義的責任はあると感じる。法人として何らかの反省している姿勢を見せた方が良いとは思う。トップや幹部が辞めれば、私たち職員は助けてくれるのか。職を失わないというのは具体的には？　不祥事を起こしている法人かもしれないが、応援してくれている家族等が多くいることを考えないといけないと感じている。

・プロポーザルの際、不祥事を抱えているという法人に公平な目で見てもらえるのか。

（３）知事の説明

（知事）大前提としてご理解いただきたいのは、法人と職員を明確に分けている。私が問題にしているのは法人のほうであり、職員は、事件の直後、生々しい現場の中で利用者を体育館に集めているが、笑い声が聞こえてくる。職員の皆さんが利用者を不安にさせないように、こんな時にも利用者を楽しませている。職員は誰も辞めていない。すごいなと思いました。その時の一杯いっぱいな中で、とても続けられないということで、職員の精神的ケアをしっかりやるようにした。現場をきれいにしただけで、もう一回そこでやろう、支援をやって下さい、というのはできないだろうという思いで、同じ場所に同じような施設を建て替えると発表したわけです。

しかし、その後にさまざまな意見があり、方針転換しなければならなかったわけです。県の立場として、本当にさまざまな意見がある中で一つのことだけで決められない、もう一回、仕切り直して津久井と芹が谷に分かれたわけです。しかし、その時から、ケア、支援のあり方についての問題点が私の耳に届いたわけです。当時はそこにしっかり目を向けなかった。早く再生させていこう、その思いが圧倒的に強かった。ですから、前へ前へと見ていたので、あの時に私の耳に入っていた津久井やまゆり園の支援の中で「こういう問題もあった。」ということに耳を傾けることができなかったのです。検証もしていなかったわけです。法人のほうも、そういう声が上がっているというのをご存じだったのでしょうけど、自ら検証するということは一切なかったのです。我々としては、それに一切向き合わないまま来てしまったのです。

そんな中で、今回、きっかけは愛名やまゆり園ではないか、津久井やまゆり園は関係ないではないか、ということですけど、一つのきっかけとなって、また当時の話になった時に一気に噴き出してきてしまうんですね。そして、来年の１月８日から裁判が始まります。裁判では、あの時に焦点が当たるのです。そうなってくると、あの時のことがまた再び出てきます。皆さんがあれをきっかけとして、厚労省のガイドラインに基づく初めての意思決定支援、歴史的な事業ですね、これに一生懸命関わって、その中で身体拘束がなくなったなど報告を受けてきた。素晴らしいことですね。前に向かっている。今問題になろうとしていることはこの部分じゃない。再びあの時のことが蒸し返されてしまうであろう。そのことに大変危機感を持っている。何もしないでやり過ごしていたらどうなるか、ということを考えたとき、その声がものすごい大きな動きとなってくる気配を察知してしまったわけです。

かなり具体的な情報が私の耳にはどんどん入ってくる。12 月 14 日の時には、裁判が始まったらどんどん新しい、いろいろなこと、悪い情報が増えてきますと言いましたけれども、私が議会で発言をした後、もういきなりどんどん情報が入ってきたわけです。で、これは大変なことだと思うんですよ。それで、わたしは皆さんが一生懸命やっているのをこの目で見ている。私は元々ジャーナリズム出身ですから、見たものを一番信じる。皆さんの頑張りというのを絶対信じる。そしてこの間、利用者の皆さん

の中で「本当によくやってもらっている。」「職員によくやってもらっている。」そのとおりだと思う。何も否定しない。そして、この間、声をあげられた〇〇さんと〇〇さんの家族（12 月 21 日に知事に直接話しをした２家族）にゆっくり話をしました。で、本当に津久井によくやってもらっている。そして、職員の家に上がり込んで、冷蔵庫を開けたりしながらというような関係が出来ている。素晴らしいことなんだなと思いました。それを私は否定しているんじゃないんです。それは素晴らしい事だとわかっていますが、法人のあり方そのものについて、我々のところに情報が入ってくる。そうじゃないという側面もあることは聴いていたんです。私のところに入ってくる情報というのは、嘘を言っているとはとても思えない。私自身が見て、いちいち言えというのは残念ながら申し上げられない。

確かに身体拘束はなくなった。でも、最近においても「え？」と思うことがあったようです。嘘を言っているとはとても思えない生々しい情報が届いています。これが現実なんですね。皆さんはそう言うと、何となく心当たりがあるんじゃないでしょうか。例えば、100％パーセントのうち 98％パーセント見事にやっている。後の２％パーセントで何かあったかもしれない。そんな中で、噴き出そうとしている。私が思っているのは、そうなると共同会だけの話ではない。県も同罪だ。だから、身を切る覚悟。そういったことがあったことを県がどれだけ把握していたか。そんな情報が上がっていたにもかかわらず、そこに県がちゃんと向き合って動いたのかといったこと。これは共同会だけの問題ではなくて、我々にも問題があると思うんです。

共同会はあの当時のことについて、自ら全く検証もしない、調査もしない、謝罪もしない、何もしないという中でずっときて、今もそういうことが起きているという状況。変えてこられた部分があるんでしょうけれども、そういう法人のあり方、そういうのは問題だと言われるんです。

でも、職員の皆さんは違う、私は繰り返し言ったが、こういう生々しい話はああいう場ではできない。なぜなら利用者の方がいたから。利用者の皆さんが当時のことを思い出してネガティブなことはすごく嫌がられるから、敢えてそういうことは言わなかった。だから、なかなか私の思いが伝わらなかった。今日は職員の皆さんなので、かなり率直に言っている。指定管理、今だったら仕切り直せる。このままいくと、もう大変な世の中の非難ごうごうの中で、「あの共同会、また指定管理を続けるのか。」ということが絶対出てくる。そこまでこの事態を持ち越せば、取り返しがつかない。今なら自助努力によってこの問題を乗り越えられる。

そんな中で、先ほど話が合った意思決定支援。大変大きな意味があったということは皆さん、正に生で感じてくださったでしょう。皆さん気づかれたでしょう。私も気づいた。つまり、利用者の目線に立つということ。どれだけ大事なことなのかわかった。我々県も含めて、利用者さんのためにというふうにやっていた。利用者のためにということはとても大事なことだと思います。利用者の目線に立つというのはちょっと違うのかなと思います。ですから、公募という形で切り替えさえていただかざるをえなくなったということをご理解いただきたい。

そんな中で、職員の皆さん、雇用の問題を大変不安に思われる。それはよくわかります。ただ、いろいろな知恵はあるんです。新しく公募する中で、いろいろな項目、条件を入れること。こういう現場でしっかり働いていらした方というのを優先的に採用する、というふうないろいろな条件があるんです。現に今までにも、神奈川県の指定管理でこれが別の法人に変わったことがありましたけれども、その時も残りたい職員は残った。法人が変わっても職員は残るというのはたくさんいた。だから法人と職員は違う。そういうことで明らかです。この間の利用者さんとお話した中で、利用者の皆さん、何々さんが絶対いいんだと職員の名前を挙げられた方がいらっしゃって、その方はぜひ残っていただきたい、そういうことをきめ細かくやっていくということ。そうすることによって、今皆さんの思っていらっしゃるご不安というものを何とかして解消していくために、しっかりやっていきたいなと思っています。

３人の方、また全員会ってきました。そして、私の口から謝ってきました。それは、今まであなたの目になっていなかった。嫌な思いをしたかもしれない。気がつかなくてごめんなさいと謝ってきました。そうしたら、〇〇さん、最初は、私の言っていることはどれだけおわかりになっているのかなという感じでしたが、話し終わって帰ろうとすると、玄関まで送ってくれました。そして、玄関から出て車まで見送りに来てくれた。気持ちが通じたんだなと僕はすごく思いました。こうやって私は、重度の障害のある方、こうやってちゃんと心が通じるんだなということを、生の体験をさせてもらったわけです。で、この３人は、今も生き生きと働いていました。本当にうれしそうに満面の笑顔で働いていました。

僕はあの場でも、津久井やまゆり園の支援が悪かったからとは言わなかった。意思決定支援をやったことによって、あの方たちは前向きな生き生きとした表情なんだ。津久井やまゆり園芹が谷園舎の中でも起きているということが大前提と言っているつもりであります。津久井やまゆり園利用者がいる中ではそこまで言えなかった。こういうプロセスを経て、県の自らの身を切る覚悟、お互いに率直に過去をもう一度見つめ直して、障害福祉のあり方が大きく変わるんです。見つめ直して、利用者目線の新しい障害福祉のあり方を一緒に作っていく。この作業を皆さんと一緒にやっていきたいということです。

３　津久井やまゆり園部課長との対話

（１）知事あいさつ

（寮長・主任へのあいさつと同様のため、割愛）

（２）職員からの意見・感想・質問

・知事の発言後、不安を抱えている職員が多いが、真摯に利用者に向き合っている。良い取組みは現場のほうに返しがなく、逆に、過去の悪い噂話に引っ張られている。悪い話というのはどういうものか。具体性がないため、不安になっている。現場の良い取組みを、そういった事でうまく発信ができない。

・我々の方向性に間違いがあるなら、そこを教えていただきたい。どこが足りないのか。正しい福祉の道へ職員を導くのに自信がない。
・裁判が始まると噴き出してくる悪い情報とは、情報元はどこなのか。それが指定期間を減らすほどの重大なものなのか。愛名やまゆり園元園長事件については、許すことはできない。指定期間の短縮や再公募とつながることは納得できないので説明を。利用者目線に立った福祉はどこの施設でも目指すもの。感動的シーンや外出など、どこの施設でもあると思う。なぜ退所した３人の生活を挙げて今回の公募への判断をしたと説明したのか。同じように事件を受けたという立場で来た上での判断にならなかったのか。
・再公募になった場合、準備が過大なものとなる。事件後、体育館での生活、２度の引っ越し、検証委員会への協力、意思決定支援など精一杯の支援が続いている。ぜひ知事の力で我々を支えてもらえる取組みをお願いしたい。
・再指定の可能性について、他法人から応募があった場合、果たして我々の努力で再指定を受けることができるのか。他に移すことが前提での話ではないかと不安に感じている。そう感じた理由は、利用者にも職員にも「安心して下さい。」と繰り返し発言している。職員が入れ替えわる再公募を進めながら、「安心して下さい。」とのご発言は「共同会にならなくても平気だよ。」ということだと思うが、ということは、もう他の法人から既に応募する声が上がっているとか、知事のお耳に届いているとか、そういったスケジュール的にも結論をある程度見込んだ中での話ではないかと。それくらい不安になって追い詰められていることをご理解いただきたい。
・本日は月命日。利用者の無念を思い尽きることのない悔しさを胸に邁進している。どうか利用者・家族が安心できるためにも、私たち職員が不安に思わないように、県所管課と二人三脚でやってきていると思うし、事件以降我々だけでなく皆さんの支えがなければここまでこられなかったと思っている。なのに、このタイミングで公募というということについては、本当に本当に理解に苦しんでいる。納得いく説明を。引き続き、かながわ共同会の職員としてこの指定管理施設を任せてもらえるようしていきたいと思っている。
・福祉先進県としてのご発言は賛同している。３年半、ありえないような体験をしている。職員は意思決定支援で更に力をつけてきている。今後も福祉先進県として協力できればと思う。
・現場は一生懸命、意思決定支援に取り組んでいる。意思決定支援の中でも現場の支援員は要。その職員が動揺しているというのが問題である。

（３）知事の説明

（知事）裁判が始まるといろいろと良くない情報が入ってくるということをお話ししました。既にいろいろな情報が入ってきている。裁判が始まったらそういうのが出てくると察知していたのですけれども、こういう形で私が方針転換したことを受けて、さま

ざまな情報が既に入ってきている。
　職員の皆さんが頑張っていることはよくわかっている。それは自分の目で見たこと、私はもともとジャーナリストですから自分が見たものを一番大事にしています。あの悲惨な現場で皆さん必死に頑張っており、感動したんですよ。

（知事による職員の評価やご家族の意見の紹介等。略）

　我々に入ってくる情報はそうではない。我々が持っている情報は全体から見れば少ない。でも、そういう情報が入ってきていることは間違いない。かつて身体拘束とか、これも今はなくなったと。素晴らしいことですね。そのきっかけになったのが意思決定支援。皆さんが一生懸命やったからこそ、難しい課題を乗り越えることができた。おそらく皆さん自身もそこで発見したことが一杯あった。今までできないと思っていたのができた。我々もすごく発見をさせていただいた。
　だから、これからどこを目指していこうとしているのか。僕は確信的に利用者目線に立った障害福祉のあり方だと思う。これまでは利用者のためにという思いであった。利用者のために、歩き回ると危ないから車いすに拘束しておきましょう。この人は暴れまわっている、ご自身がケガするかもしれないから、危ないから閉じ込めておこうと。この人のために、たぶん現場はそんな感じだと思います。
　利用者の目線に立つということは、縛られる人の気持ちになる、閉じ込められている人の気持ちになる。重い障害のある方で、そういう気持ちになるというのはすごい難しいことだと思う。皆さんが実際にやって成果を挙げられた。できるということではないでしょうか。３人の方がここを出られて、そして元気に働いている姿をこの間、確認してまいりました。３人ともみんな確認してきました。みんなお話をしました。今も大変明るく元気。あんなことができる。そこはやっぱり利用者目線に立つから、あんなことも可能なんだ、ということを僕は申し上げたんです。
　ここの法人よりあっちの法人の方が良いとか悪いとかいった事は全然言っていない、そういう表現は絶対していない。意思決定支援において、その人の本当の気持ちに立つということをしたから、あんなことができたんだということを申し上げた。裁判になると悪い情報が出てくるというのは、当時から私の耳にはいろいろな情報が入ってきた、正直。ただ、あの時の気持ちは、あの時の現状はどうだったか、過去はどうだったかというよりも早く再生していきたいという気持ちが圧倒的に強くて、当時のことをしかりと検証するという作業をしていなかった。そこは今、反省している。当時のことは今、悪い情報として入ってくるということです。その時のことが蒸し返される。じゃあすべて良くなったのかというと、私が議会で表明した後、最近のこともよく出てくる。嘘をついているとはとても思えない。しかも最近のことであっても、おそらくこれからもっともっと出てくる。たぶん全体から見たら２％、わずかでしょう。98％素晴らしい支援をしていた。ほんの２％、１％、そういうことがあったときは、それが出てきてしまう。なぜ私が急いだのか。このまま時間が過ぎて来年になると、

当時の話がどんどんどんどん話題になってしまう。裁判の経過とともにどんどん出てきてしまう。それとともにいろいろな動きが出てくる可能性がある。その動きを察知しています。そこまでいった時に、「共同会にそのまま継続させるのか。」という声が絶対に上がってくる。そこから仕切り直ししたら、利用者の皆さんが一番楽しみにしている令和３年に引っ越しする、これができなくなる。それを避けなきゃいけないと思ったから、私の全責任において唐突かもしれないけれど決断して、というふうにご理解いただきたいと思います。

私の頭の中での整理は、法人と職員は違う。明確に線を引いて分けて考えています。当時のこと、いろいろ情報が出てきている中、検証、反省、謝罪がなかった。これは共同会だけのせいにするわけにはいかない、県も同罪だと。あの部分の情報は来ていた。それに対して本当はどうなんだ、ああいう悲惨な状況の中で必死に頑張っていらっしゃる職員に対して検証しろということができなかった。だから今頃になった。この話は身を切る覚悟でやっていく。一部だけれど、問題を起こしていた。それに対して我々も責任を感じざるをえない。そんな中でそういった事を乗り越えた先の方向性はどこかというと、利用者目線の支援。意思決定支援を徹底的にやってみたことでわかった。今まで私はわからなかった。だから〇〇さんに謝ってきた。今までつらい気持ちとかあったんだろうけど、気づいてあげられなくてごめんねって謝ってきた。だからみんなで。

自分たちのすべてをしっかりと見直して、目を背けずすべて見て、ともに乗り越えていく。そういう作業をしていきたいと思っています。そして、新たな公募をしますとか、法人が手を上げる権利はあるけれど、今のまま手を上げたら、それは世の中通らない。その時に共同会が手を上げるために、この時、自分たちはこうだったんだ、それをこのように変えるということ、変えていく姿というものを見せて手を上げる。新生共同会だったら、それは十分審査の対象になりうると私は思います。そういう手続きの中で透明にやっていく。

職員の皆さん安心して下さい。というのは、法人が変わっても職員が働き続けることができる。そんな例は今までもいくらでもある。ただ、利用者の皆さんが「あの職員さんにずっと面倒見てもらいたい。」「あの職員さんすごくいい人だから。」という人たちは残ってもらえるように、それは強制的にはできませんけど、残ってもらえるような形にというのは、我々は努力していきたいというふうに思っています。そして新しい法人がもし決まった場合には、新しい法人と共同会と県とが一緒になって、雇用といった面でいろいろ相談しながらやっていく。そんな事例もある。そういうことは丁寧にやっていきます。

４　対話後の知事の感想

翌日の新聞報道によると、知事は、職員との対話の感想として「ある程度のご理解はいただけたかと思う。」と述べたとのことです。